

2026年1月24日

ご寄付者の皆様

関係者各位

平素より、あしなが学生募金事務局の活動に温かいご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。このたび、私たちあしなが学生募金事務局では、2026年の募金使途について重要な決定をいたしましたので、ここにご報告申し上げます。

私たちあしなが学生募金事務局は、2026年の募金使途を全額「国内遺児の奨学金」とすることを決定しました。あわせて、アフリカ遺児支援については、対話を重ねながら理解を広げる取り組みに力を入れ、アウトリーチ（学校やイベントへの訪問、ワークショップなど）を発展形と位置付けて参ります。

2023年、あしなが育英会は高校生への奨学金制度を、貸与型から給付型へと変更しました。これにより、将来の返還を不安に感じて申請を控える「借り控え」が解消され、奨学金を必要とする家庭の存在が、これまで以上に明確に見えるようになりました。その一方で、支援ニーズの増加に奨学資金が追いつかず、2025年度には申請者全体のおよそ4割が奨学金を受け取れない状況が続いています。必要としている子どもたちが確かにいるにもかかわらず、支援を届けきれていない。この現実に、私たちは強い課題意識を抱いています。

この現状を前に、募金のインパクトを最大化する必要があると考えました。そこで、複数の使途に分散させず、最も切迫したニーズである国内遺児の奨学金に集中することを選びました。一点集中により、より多くの子どもたちに確実に支援を届けられる体制を整えるため、ご支援の拡大を呼びかけていきたいと考えています。

一方で、募金使途の一本化は、アフリカ遺児支援をやめるという意味では決してありません。むしろ、より持続可能で、社会に根づいた支援の形へと進化させるための選択です。私たちは、街頭募金だけでアフリカ遺児が直面する複雑な課題を十分に伝えることには限界があると感じました。一度きりの募金で終わる関係ではなく、「知る」「考える」「関わり続ける」へつながる長期的な支援の土台を育てること。それこそが、これからアフリカ遺児支援に必要な姿だと私たちは考えています。

2050年には、世界人口の4人に1人がアフリカ出身になるとも言われています。アフリカの成長と人材育成は、世界全体にとって重要な課題です。私たちは、あしながのアフリカ出身留学生と共に、あしなが運動の歴史や奨学生一人ひとりのストーリーを社会に届けていくことで、単なる支援の受け手・提供者の関係ではなく、共に学び合うつながりを広げたいと考えています。

あしなが学生募金事務局がこれまで大切にしてきた、「日本の遺児もアフリカの遺児も、等しく教育を受ける権利がある」という信念は、今も変わりません。私たちは国や地域が違っても、困難を乗り越える力を持ち、支援によって得た学びや優しさを次の誰かへとつなげていく存在なのです。

国内遺児の奨学金支援と、アフリカ遺児支援の新たなかたち。その両方に責任をもって向き合いながら、私たちはこれからも、教育の機会を未来へとつなぐ活動を続けていきます。

本決定の背景と私たちの思いをご理解いただき、今後とも教育の機会を未来へつなぐ取り組みにお力添えを賜れましたら幸いです。

あしなが学生募金事務局